



Title	高校生の目的意識のクラスター分析 時間的展望と社会的展望からの考察
Author(s)	大城, 琴恵; 島袋, 恒男
Citation	琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要(4): 59-65
Issue Date	1996-11
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8156
Rights	

高校生の目的意識のクラスター分析

— 時間的展望と社会的展望からの考察 —

大城琴恵* 島袋恒男**

(1996年9月30日受理)

I 背景と目的

高校教育が義務化の傾向をたどる一方、沖縄県の高校教育の問題である中途退学、進学率の低さという学業適応の問題や、それに関連した高校生の生活スタイルの問題（学習時間の少なさ、アルバイト、深夜徘徊等）は、社会の変化とともに深刻化している感がある。これらの問題を総合的に考察すると、沖縄県の高校生は将来の目標の実現に向けて、現在の行動をコントロールしているとは言い難く、むしろ現在の享楽を重視する傾向にあると予測される。

大城（1996）は時間的展望が人々の現在の行動様式を予測し、理解するうえで重要な概念であることと、同時に人々の行動を動機づけるのは将来の目標である（Nuttin, 1985）ということ踏まえ、沖縄県の高校生の目標の内容（時間的展望の質的側面）をNuttin（1985）のINOM尺度（The Inventory of Motivational Objects: 動機づけ的帰納法（MIM））によって得られた、人々が抱いている将来の目標や実現させたい事象のリストを用いて検討した。高校生の目標の内容は因子分析の結果、「人々が互いに助け合うこと」や「全ての人にとって平等な社会になること」に代表される①博愛・平等、「成績が上がること」や「一生懸命勉強すること」に代表される②個人の能力、「ほしいものをたくさん手に入れること」や「もっと自由になること」に代表される③所有・快楽、

「自分の計画を実行すること」や「自分の考えをもつこと」に代表される④自己実現、「部活動で頑張ること」や「生徒会活動すること」に代表される⑤課外活動、「夜遊びすること」や「お酒を飲むこと」に代表される⑥娯楽、「人から理解されること」や「人から尊敬されること」に代表される⑦社会的承認の7つの因子が抽出され、以上が沖縄県の高校生の目標の内容であることが示された。さらに、これらの目標と学校生活スタイルの関連について検討した結果、個人の能力、自己実現、課外活動という目標を強く示す者は、「高校生活は楽しい」や「授業に満足している」に代表される学校適応的な生活スタイルを示し、その反対に所有・快楽、娯楽という目標を示す者は、「学校生活に満足していない」や「授業は理解できない」などに代表される学校不適応的な生活スタイルを示した。それに加えて、個人の能力、自己実現という目標を示す者は、「親しい友人がいない」や「友人と遊びに行かない」などに代表される孤立型の生活スタイルを示し、逆に、個人の能力や自己実現の目標を示さない者は「卒業後の進路は就職である」や「アルバイトをしている」などに代表される就職志向の生活スタイルを示した。つまり、これらの結果は、高校生がどのような目標を内面化しているかによって、彼らの高校生活スタイルが決定されるということを示していた。ところで、目標の内面化の側面は

*徳嶺医院

**教育心理学科

関連していることが考えられる。見田（1965）は、価値を主体的な選択行為の基準になるものとして捉え、行為者が、展望を「未来」に向けて、「社会」に向けて広げていくことによって、自己の直接的な衝動をいったん対象化し、目標の実現に向けて主体的に行動することができる」と述べている。以上のことから、見田は価値意識を人々の現在から未来にわたる見通しに関係する時間的展望と、自己と社会関係に関する見通しである社会的展望の2つの次元から分類することが可能であることを示している。それによれば、現在中心と自己本位で特徴づけられる価値意識は「快－苦」を基準とするものであり、どちらかという衝動的、刹那的生き方である。その反対に、未来志向と社会志向によって位置づけられる価値意識は「正－邪」を基準とするものであり、それは自己の利害だけでなく他者の利害を配慮し、自己の行動を捉え、「利－害」の価値基準を裁く、より高次の価値基準である。先に示した高校生の目標の内容は、このような価値意識の観点からどのように捉え、考察できるだろうか。また、中川（1980）は「小学生の目的意識を育てる条件」として、仲間関係におけるひらかれた心、他者の体験に感動することが最も重要であると指摘し、社会性の発達が目的意識を方向づけていると述べている。以上のような指摘からすると、目的意識について言及するならば、時間的展望のみならず、社会的展望との関係でも検討しなければならないと思われる。これらの指摘を踏まえ、先の高校生の目標を整理し、その時間的展望の在り方と社会的展望の在り方から考察する必要がある。具体的には、先の7つの目標をクラスター分析にかけてみると、どのようなカテゴリーに分類することができるだろうか。そこで抽出されたクラスターの特徴は、見田（1965）のいう時間的展望や社会的展望との関係で、どのように考察されるのであろうか。そのような問題点を検討することが本研究の主目的である。それに加えて、このように分類された高校生の目標が彼らの現在の生活スタイルやその関連要因とどのように

関わっているかを明らかにする。

II 方法

1 調査対象者

沖縄県北部の県立県立普通高校1校3年生3クラス（男子49名、女子71名、計120名）同じく職業高校1校3年生2クラス（男子13名、女子54名、計67名）、沖縄県南部の普通高校1校3年生2クラス（男子35名、女子39名、計74名）、同じく職業高校1校3年生2クラス（男子28名、女子39名、計67名）、同じく進学高校1校3年生3クラス（男子50名、女子60名、計110名）合計438名。

2 調査尺度

INOM尺度：Nuttin（1985）のINOM尺度を翻訳し、そのうち予備調査の結果得られた32項目を採用し、さらに自由記述によって得られた7項目を加え作成し、「とても望んでいる」～「まったく望んでいない」の5件法で回答させた。

生活スタイル尺度：武内ら（1977）の高校生文化を測定する項目より15項目、さらに県教育庁による「高校生の生活実態と意識調査」を参考に27項目を加えた、42項目を作成した。

生活感情尺度：落合（1995）の生活感情尺度より、予備調査の結果19項目を採用し、「いつも感じる」～「まったく感じない」の4件法で回答させた。

3 調査期日

1995年7月～9月に教科担任を介して、調査の説明を行い回答させた。

4 分析方法

7つの目標を類似性行列に基づいて、ウォード法によるクラスター分析を実施し、2つの目標のクラスターを抽出し、2つのクラスターの合成得点をt検定を用いて、性差、学校種差、進路希望別の差を見出した。さらに2つのクラ

スターの合成得点と、数量化Ⅲ類を用いて見いだした生活スタイルの1軸と2軸の得点との相関係数を求め、その関連を見出した。また、2つのクラスターの合成得点と生活感情の4つの因子の得点との相関係数を求め、その関連を見出した。

Ⅲ 結果と考察

1 クラスター分析の結果

先に示した、高校生の7つの目標を類似度距離行列に基づき、クラスター分析にかけた結果が図1である。その結果から、2つのクラスターに分けることが適切と考えられる。1つは⑥娯楽、③所有・快楽、⑦社会的承認、⑤課外活動が相互に距離の近いグループとしてまとまっている。他の1つは、①博愛・平等、④自己実現、②個人の能力が相互に近いものとしてまとまっている。前者のクラスターはどちらかという具体的な、感性的な目標であり、またそれと同時に時間的に現在に関係していると思われる。さらに社会的承認の項目には社会に積極的に働きかける要素がなく、また、課外活動は娯楽と距離が近く、同じクラスターにまとまっていたことから、今日の学校教育における課外活動には、娯楽の要素が含まれていると思われ、何れも自己中心的目標であると捉えられる。よって、このクラスターを「現在的・自己中心的目標」と命名した。時間的展望と社会的展望の観点か

らすれば、現在志向と自己志向という特徴をもっていると考えられる。具体的に述べると、これらの目標を示す高校生は将来の見通しと自他関係の見通しが弱いことが考えられる。つまり、どちらかと言えば、刹那的な目標であるといえる。それとは反対に、第2クラスターはどちらかという将来の出来事に関係し、また同時に社会的目標であるともいえ、時間的展望と社会的展望の観点からすれば、両方の展望の発達に関係している目標であると思われる。その特徴は抽象的なものであり、青年期の形式的操作の発達に基づいている目標群であると思われる。そこで第2クラスターを「将来的・社会的目標」と命名した。以上の結果をまとめると、高校生の目標は時間的展望と社会的展望の有無という観点から、2つのクラスターに分類することができると思われる。ところで、目的意識の2つのクラスターは、時間的展望の現在志向と社会的展望の自己中心的志向が1つのクラスターとしてまとまりを示し、時間的展望の未来(将来)志向と社会的展望の社会志向が1つのクラスターとしてまとまりを示したことから、時間的展望と社会的展望は相互に関連しながら発達するものということが示唆された。以上の結果は、見田(1965)の価値意識の理論を統計的に確認したと言えるであろう。

ところで、島袋(1996)は人々の目的達成行動を予測する理論として開発されたCAMI尺度(進路達成への統制感、その手段-目的関係の

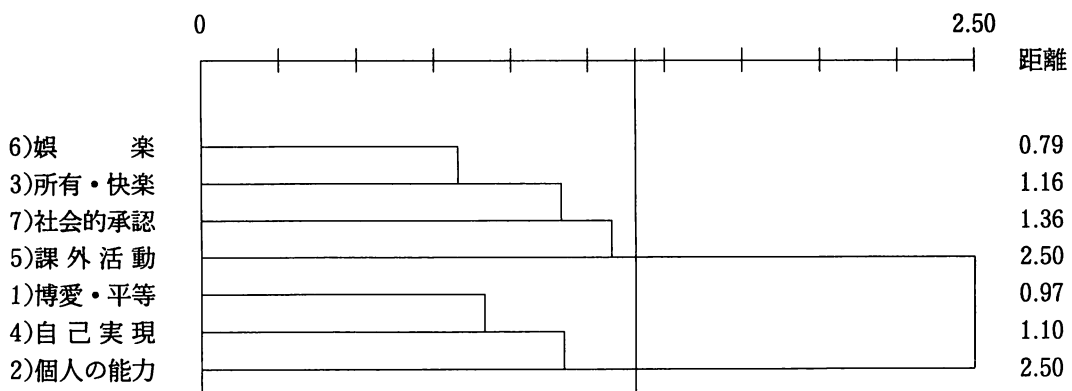


図1. 目的意識のクラスター分析

認知、その手段の保有感)を用いて、高校生の進路意識の特徴を捉えた。将来的、社会的目標である自己実現や個人の能力の目標を強く示す者は、先の生活スタイルとの関連において、学習時間が長く、授業も理解していた。よって将来的、社会的目標を持っている者は、島袋の指摘する達成への統制感が高い者と予測され、努力の手段保有感、能力の手段保有感、他者の援助の保有感の得点の高い者と推測される。一方、現在の・自己中心的目標を示す者は、統制感が低く、手段-目的関係の認知の「運」、「能力」、「未知の原因」および運の保有感と関連している可能性がある。

それでは、このような特徴をもつ高校生の2つの目標は、性別、学校種、進路希望別によってどのような差異を示すだろうか、またこれらの目標は彼らの高校生活スタイルをどのように規定しているのだろうか。

2 目的意識の性差について

表1は目的意識の2つのクラスターの得点の性差について検討した結果である。「将来的・社会的目標」において、女子が男子より有意に高値を示している。つまり、女子に比べ男子は、時間的展望や社会的展望が発達しておらず、よって自己の現実を対象化し、目標の実現に向けて主体的に行動することができないということが示唆される。大膳(1991)は沖縄県の高校中退者の特徴として、女子より男子が多いことを明らかにしている。また、県内の高校生の進学率は女子が男子を上回っており(平成6年度、学校基本調査)、さらに、男子より女子の方が学校適応的生活スタイルを示している(大城、1996)。このような、男子における高校教育の問題は、彼らの目的意識の希薄さがその原因の1つと考えられる。よって、何故女子に比べて男子は、将来的・社会的目的意識を持っていないのか、今後検討すべき課題と思われる。

表1. 目的意識の性差の検定

目的意識	性		t値
	男子	女子	
現在の・自己中心的目標	62.67 (9.59)	63.34 (8.23)	0.761ns
将来的・社会的目標	96.62 (11.04)	99.05 (9.46)	2.376*

* $p < .05$ () : SD

3 目的意識の学校種差について

表2は目的意識の2つのクラスターの得点の学校種差について検討した結果である。表2の結果から、「現在の・自己中心的目標」において、進学校と職業校が普通校より有意に高値を示した(表中のアルファベットのちがいは平均値の差が有意であることを示す)(進学校=職業校>普通校)。一方、「将来的・社会的目標」においては、進学校と普通校が職業校より有意に高値を示した(進学校=普通校>職業校)。つまり、進学校の生徒は、「現在の・自己中心的目標」と「将来的・社会的目標」の両方を持っていることになるが、「現在の・自己中心的目標」の達成希望年齢(20.0歳)は未来である。よって、進学校の結果には、日頃から「現在の・自己中心的目標」の実現が抑圧されているため、その反動として現われたものと思われる。一方、職業校は他の高校に比べると、「将来的・社会的目標」は持たず、「現在の・自己中心的目標」を強く示す傾向がある。ところで、県内の中学生は高校受験の際に、第2希望として職業高校を選択する傾向があり、職業高校に不本意入学者が多い(大城、1994)。さらに、職業高校の生徒に学校不適応的生活スタイルを示す傾向がある(大城、1996)。以上のことから考えると、中学校段階での振り分け中心の進路指導によって、不本意に職業高校に入学した生徒は、学校生活に適応できず、3年生になっても時間的、社会的に広がりをもった目的意識を持ってないと

ということが示唆される。

表 2. 目的意識の学校種差の検定

学校種 目的意識	進学校	普通校	職業校	F値
現在の・自己中心的目標	64.33 (7.56) a	62.11 (9.75) b	63.22 (8.22) a	2.343 ⁺
将来的・社会的目標	100.29 (7.99) a	99.50 (10.33) a	94.15 (10.54) b	15.295 ^{***}

+p<.10 ***p<.001 ():SD

4 目的意識の希望進路別の差について

表 3 は目的意識の希望進路別の差について検討した結果である。表 3 の結果から、「現在の・自己中心的目標」においては、有意な差がみら

れなかった。一方、当然のことながら「将来的・社会的目標」においては、進学希望者が就職希望者より有意に高値を示した。

表 3. 目的意識の進路希望別の検定

進路希望水準 目的意識	大学	短大	専門学校	就職	F値
現在の・自己中心的目標	70.94 (10.27) a	70.81 (7.59) a	71.66 (9.86) a	72.64 (8.08) a	0.486ns
将来的・社会的目標	99.94 (9.23) a	99.59 (7.87) a b	96.92 (9.46) b	92.96 (11.84) c	8.424 ^{***}

***p<.001 ():SD

5 目的意識と生活スタイルとの関連

表 4 は目的意識の 2 つのクラスターの得点と生活スタイルの関連を検討した結果である。「現在の・自己中心的目標」と生活スタイルの 1 軸（学校適応－学校不適応）及び 2 軸（就職

志向－孤立型）の間には有意な相関が見られなかった。つまり、「現在の・自己中心的目標」は、高校生の現在の生活スタイルにあまり影響を与えないということが示唆される。一方、「将来的・社会的目標」と生活スタイルの 1 軸

(学校適応－学校不適応)の間に高い負の相関がみられた(学校適応はマイナス方向)。よって、「将来的・社会的目標」をもつ者は、学校適応的生活スタイルを示す傾向があるということがわかった。以上の結果から、沖縄県の高校

生のよく指摘される生活スタイル上のさまざまな問題(学業不振、深夜徘徊、アルバイト等)の解決には、彼らに将来的・社会的目的意識を持たせることが重要であるということが統計的に確認できたと思われる。

表4. 目的意識と生活スタイルの相関

生活スタイル 目的意識	1軸(学校適応－学校不適応)	2軸(就職志向－孤立型)
現在の・自己中心的目標	-.039	.073
将来的・社会的目標	-.369***	-.052

***p<.001

6 目的意識と生活感情の関連

表5は目的意識の2つのクラスターの得点と生活感情の関連を検討した結果である。目的意識と不安、充実感との間に正の相関関係があり、特に「将来的・社会的目標」と「不安」、「充実感」との相関が高値を示していた。つまりこの結果は、「将来的・社会的」目標のある高校生は将来のことを真剣に考えるため、充実感もあるが、必然的に不安も高まると考えられる。さらに、「現在の・自己中心的目標」と「あきらめ」の感情の間に正の相関があり、「将来的・社会的目標」と「あきらめ」の間に負の相関があった。つまり、「現在の・自己中心的目標」を強く示す者はあきらめの感情をもっているということである。ところで、感情は行動を生起

させるエネルギーとなる側面がある。よって、その「あきらめ」の感情が、彼らの行動を不活発なものにしていると予測され、その結果、彼らは主体的に時間的展望や社会的展望を広げていくことができないでいるということが示唆される。一方、「将来的・社会的目標」を強く示す者は、「充実感」を強く感じ、「あきらめ」の感情を抱いていないため、主体的に時間的・社会的展望を広げていると思われる。ところで、先の生活スタイルとの関連においても、彼らは学校適応的生活スタイルを示していたことから、時間的展望と社会的展望が広がることによって適応的生活スタイルを示すことができるということが示唆される。

表5. 目的意識と生活感情の相関

目的意識	生活感情			
	不安	充実感	孤独感	あきらめ
現在の・自己中心的目標	.086 ⁺	.148**	.072	.123*
将来的・社会的目標	.222***	.181***	.111*	-.091 ⁺

⁺p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

IV まとめ

(1) 本研究の主な目的は、高校生の抱いている目標の内容を時間的展望と社会的展望の観点から捉え、分類することであった。その結果、高校生の目的意識は、2つのクラスターに分類することができ、1つは時間的、社会的に展望の広がりをもたない「現在の・自己中心的目標」、他の1つは時間的、社会的に展望の広がりをもつ「将来的・社会的目標」であった。このように、時間的展望の現在志向と社会的展望の自己中心的志向が1つのクラスターとしてまとまりを示し、一方、時間的展望の未来（将来）志向と社会的展望の社会志向が1つのクラスターとしてまとまりを示したことから、時間的展望と社会的展望は相互に関連しながら発達していることが示された。

(2) 次にこの目標の2つのクラスターの得点の性差、学校種差、進路希望別の差を検討した。その結果、性差は「将来的・社会的目標」においてみられ、女子が男子より有意に高値を示した。学校種差は何れの目標にも見出され、まず「現在の・自己中心的目標」において、進学校＝職業校＞普通校の間に有意な差が見られた。一方、「将来的・社会的目標」においては、進学校＝普通校＞職業校の間に有意な差が見られた。進路希望別の差では、「将来的・社会的目標」において差が見られ、大学＝短大、短大＝専門学校、大学＞専門学校、大学・短大・専門学校＞就職の間に有意な差が見られた。

(3) さらに、2つの目標と生活スタイルとの関連を検討した結果、「将来的・社会的目標」と生活スタイルに有意な相関が見られ、「将来的・社会的目標」を高く示す者は、学校適応的生活

スタイルを示し、低く示す者は学校不適応的生活スタイルを示した。また、2つの目標を生活感情の関連を検討した結果、何れの目標においても「充実感」、「不安」と有意な相関が見出され、特に「将来的・社会的目標」において、高い相関がみられた。さらに、2つの目標と「あきらめ」の感情に有意な相関がみられ、「現在の・自己中心的目標」と「あきらめ」の感情の間に正の相関、「将来的・社会的目標」と「あきらめ」の感情の間に負の相関がみられた。

引用文献

- 大膳 司 1991 沖縄県における高校中途退学の学校組織的要因 第43回九州教育学会大会発表論文集
- 見田宗介 1965 現代日本の精神構造 弘文堂
- 中川作一 1980 小学生の目的意識を育てる条件 未来をひらく教育, 60号, 27-45.
- Nuttin, J., & Lens, W. 1985 Future time perspective and motivation: Theory and research method. Leuven: University Press/LEA.
- 大城琴恵 1994 高校生の不本意入学と自尊感情 琉球大学教育学部研究生論文（未公刊）
- 大城琴恵 1996 時間的展望からみた沖縄県の高校生の生活スタイルと対処行動 琉球大学大学院 教育学研究科 平成7年度 修士論文（未公刊）
- 島袋恒男 1996 高校生の進路達成への統制感とその手段の保有感と認知に関する研究（I）——進路CAMIの作成とその発達—— 琉球大学法文学部人間科学系紀要 「ヒューマンサイエンス」, 第2号, 69-88.